



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL: 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail: daimao@travelmitra.jp)

霧が覆い隠すシッキム王国の“神秘” (1)

少女の夢をかなえてあげたい。

少女はかつて『未開の顔・文明の顔』という本を読んだ。その中に「シッキム」という国名が載っている。ヒマラヤ山麓の東に位置する王国である。ヒマラヤ（大雪山）には神秘の霧が立ち込めている。少女はそれに魅惑され、いつか訪れてみたいと夢見ていた。

その夢をかなえるのがわが輩の勤めである。われら三人組は、かつてデカン高原で親孝行息子と盲目の老母との奇跡的な遭遇を体験している。わが輩とインドに行くと、何か不思議な現象が生じることを少女は知っている。また何か奇跡的なことに出会えるかもしれないという期待が少女にあった。

わが輩には現実的な期待があった。わが輩の恩師の恩師の恩師のヒマラヤの棲家を探し当てることである。いったいその恩師とは誰なのか、と問いたい読者諸氏の焦る気持ちはわかるが、ここはインド的にゆっくりと話を進めてみたい。

わが輩は未明4時に起床しモノレールで伊丹空港にむかった。打ち合わせ通り途中駅で少女と合流した。空港でもう一人の女性と合流し三名で羽田空港へ、リムジンに乗り成田空港に定刻通りに着いた。インド航空AI 307便に搭乗したが、少女たちと離れて座ることになった。座席はABC、DEF、GHIの3席ずつが並んでいる。わが輩の席は24H、つまり通路側(G)と・窓側(J)の間ということになる。307便が離陸すると、後ろの中年女性3人がぺちゃくちゃとお喋りを始めた。寝不足でナーバスになっていたのか少し気になったが、やがて眠りにおちた。

安定飛行になりわが輩は目覚めたが、まだお喋りは続いていた。左隣のG席をみると青年が背筋を伸ばし呼吸法(アヌローマ・ヴィローマ)と瞑想をしていた。その隣のF席(通路側)の若い女性は教本『心』を読んでいた。G君とF嬢は夫婦かと思いき、「席をかわりましょうか」と申し出たが断られた。のちに夫婦でないことが分った。右隣のJ席女性は読書に熱中していた。読書灯が故障(インド航空名物)で薄暗いのに、行間に傍線を引きながら注意深く読んでいる。(しずかだ。後方の席でなくて良かった)

機内食を食べ終わったら、わが輩(H席)を挟んでG君とJ女史が話し始めた。これで二人がお仲間だと認識できた。お仲間なら、話すこともあるであろう。ところがその会話が3時間も続けば読者諸氏は我慢できるだろうか。

東京風大魔王なら「少しひかえてもらえませんかね」

関西風大魔王なら「ええかげんにやめなはれ！」

いずれにしても、デリーまでの数時間は気まずい雰囲気はただようことになる。それなら真理を愛

する大魔王なら、どうするか。わが輩がその会話に加わることにした。

それで分かったことは、わが輩の周囲は、何やら怪しいスピリチュアル系のグループだということである。だからといって、G君に陰鬱な印象はなく、むしろ実直な好青年のように思えた。ネットでグループのことで知りコンタクトを取った。小柄なJ女史はいつもニコニコ風で、話し方に全く嫌味がない。J女史が一方向的に話しG君が「素晴らしい」「マジですか」などと相槌を打つばかりであった。このJ女史とは何者なのか。

「医療関係なのよ」

そうすると女医か、いやそうはみえない。看護師、療法士かもしれない。ヨーロッパで十年間程滞在した経験があるそうだ。「ご専門は何ですか」と訊ねたら、心理学、フロイト、ユングの名をだしてきた。それで心理カウンセラーだと判明した。主に耳鼻科医師からクライアントを紹介してもらってカウンセリングをしている。カウンセリングのテクニックを次々に話すと、G君は「すごい！」と感心するばかりであった。わが輩には若干「自慢話」のように聞こえた。

心理学を専攻する人たちが陥る病がある。それを学べば、人さまの心が分ると誤認することである。分かるのは性癖心的傾向などで、心そのものや人格まで分ることはない。カウンセラーが陥りやすい病は、クライアントを心的操作しているということ、「あんたのことは分かっている」と誤認することである。そもそも分かっていたら、このグループに加わらなかった、とわが輩は思うけど。

人脈も多彩のようで、「空中浮揚」写真の主とも懇意だと言った。大魔王の「ヒマラヤ空中浮遊」写真があるよ、と言おうかとおもったがやめた。それは「お笑い写真」だから、笑いをとれない人たちに見せてもムダなことである。この写真を毎日新聞の記者にみせたら、掲載してもよいかと聞かれた。もちろんOKだが「記者をクビなるよ」と言ったら引き下がった。

J女史が、ネオ・ヒンドゥーイズム（新ヒンドゥー教）の旗手がいると言った。なんでも、空中から物質（灰や指輪）を取り出す超能力がある、とのことである。インドでは行者出家者は独身が原則だ。ところが彼にはドイツに妻がいる、という。それで伝統的ヒンドゥー主義に「新」をつけたのかもしれない。自称超能力者サイババは、一応伝統的ヒンドゥー主義の枠内にあったが、ネオは禁欲的ヒンドゥー主義ではなく、世俗的ヒンドゥー主義を意味しているようだ。

「その旗手にお会いになりましたか」

J女史は会ったと答えたが、名前を正確に言えなかった。畏怖すべき存在で、名前を口にだすのも憚ったのか、単に記憶力が弱いのか、わが輩には分からなかった。そこで、わが輩はそのボケにツッコミをいれた。

「ああ、その人なら、天満橋駅のスター・バックスで一緒にコーヒーを飲みましたよ」

G君が「マジですか！」と驚嘆した。数珠じゃらじゃらの行者風のインド人青年が一人お茶を飲んでた。人懐っこいわが輩がその兄ちゃんに親しく声をかけたことがあった。

わが輩にも超能力があると言えば、眉唾ものだと読者諸氏は思うであろう。（読者が正しい）しかし、ここでは詳しく述べないが、その片鱗が『週刊朝日』（1980年2月）に掲載されたことがある。

おそらくJ女史は、「このおっさんはタダ者ではない」と感じ取った、とわが輩はみた。このカウンセラーは、またまた「わが輩」を読み違えた。わが輩は只のおじさんにすぎない。しかし今度は真面目にツッコんでみよう。J女史はカトリック教徒だと聞いたからである。

次号で、このグループの正体を明らかにしてみよう。可能なれば、奇跡や超能力の本当の意味を語ってみたい。